

伝えたい思い、

伝わる思い、感じる心

渡辺 満美

「あなたたちは処置や治療をするのではなく、手当てをするのです。子どもの傷に手を当てるだけでなく、その子の心にも手を当て、気持ちにも添うのです。そして、その子から伝わってくるものを感じる心を忘れてはいけません。」

この言葉は、私が大学時代に聞き、とても印象に残った言葉です。私がこの言葉を聞いたのは、

まだ現実でない子どもたちとの生活を想像し、最も自信のない看護の勉強（知識・技術）をもっと知りたいとあせっていた時期でした。そんな時に聞いたこの言葉は、「看護に実技は必要。しかし、それだけでは補えないものがある」といわれた気がしたものです。

— 気持ち伝わったのでしょうか… —

幼稚園の保健室はジュータンが敷かれ、靴を脱ぎ、ごろごろとしたりも出来ます。そして、小さなテーブルが二つ、二人掛けのソファアが二つ、たくさんの絵本。もちろん、この他にベッド、ロッカー、職務の机もありますが、まるで小学校以上の養護教諭が欲しいと思うような空間がひろがります。そこでの生活は、今までの私の環境をすべて変えました。

以前は、私を必要として子どもたちは保健室に訪れていました。そして、朝から放課後までほとんど途切れることなく、子どもたちとゆっくり一対一で対応して来ました。ベッドに寝ながら、ぼそぼそと話し始める子どもや放課後、数人で訪ねて来る子どもたちとは、いろんな話をしました。しかし、今は保健室に入ってくる子がすべて、私を必要として入って来ている訳ではないのです。保健室というちょっと静かな場を必要とし

ていることもあるのです。多くの子どもたちと過ごす中で、必要だと感じる子どもにも必要だと思わしきに対応するのです。そして、何より自分のけがした場所、どれくらい痛いかなどはもちろん、言葉で伝え合うことが難しかったのです。

だれか泣いている…

「なんだか、調子が悪いみたいなの。ちょっといいかしら？」と担任の先生からの言葉。「なぜ、泣いているのかな。何か嫌なことでもあったのかな」と思いながら熱を測ってみると、熱があったのです。私は担任の先生の「調子が悪いみたい」という言葉からしか、子どもの状況を感じることが出来なかったのです。「今まで何を



してきたんだろう。なんて、言葉から伝わってくるものに頼っていたのだろう」と思わされました。今なら、熱があるのかもしれない、体調が悪いのかもしれないと子どもの様子から何か感じることができるとも、あの時の私は、今までと違う環境に大切なことを忘れていたと思いました。

幼稚園の子どもたちは言葉を使い、相手に伝えることはまだまだ難しいです。しかし、伝えてくることがない訳ではないのです。子どもと手をつないだ時、伝わってくる子どもの思いがあります。子どもを膝に乗せ、本を読んでいると呼吸から伝わってくるものがあります。子どもに手当てをしていると、そこにも身体から伝わってくる気持ちがあります。

すごい勢いであばれていた子が、言葉はなくても先生に抱きとめられて、落ち着くことがよくあるように思います。それも、二人の間では、呼吸

が一緒になって子どもは落ち着いてくる。それだけではなく、そこから先生も何かを伝えていき、子どもも何かを感じ取っているのではないかと思っています。

この言葉にしている思いは、こちらがその子を感じたいと思った時に伝わってくるもので、相手を感じたい、知りたいと思った時にだけ感じたり、気づいたりするかもしれないと思います。

でも、ここには伝えたい側が思った、そう伝わったという、思いも入ってしまうのです。だから、相手の思いを感じる心と同じくらい、言葉で伝え合うことも大切になるのだと思います。私は相手に何か伝えたい時、どう伝えたいのでしょうか。そして、それは相手に私の思いが、私の思いのまま伝わっているのでしょうか。伝える相手にどこまで、どれだけ伝えたら相手に伝わるのでしょうか。……

言葉、身体、表情など伝える方法はたくさん

あつても、出会ったばかりの人、思いがすれ違っている人などとはやはり言葉が大切な伝える手段であることと、相手の思いを聞く手段にもなるのだと思います。相手にどうしても何かを伝えたいと思う、しかしその相手とは考え方が違う。どうしても相手との間で分かり合えない時、私たちは相手が何を思っているかを考えます。伝えたいと思った時に相手の思いを考えたりするのは、伝える側も相手には、分かってくれたいという思いがあるのだと思います。

何かを言葉で伝えようとしたときも、言葉だけが必要なのではなく、相手を感じる心は必要になってくる気がします。その分相手の思いを感じる心は鈍らせてはいけないし、人の思いを感じる心を常に持ち続けることは伝える前に持つていて、自分の思いを伝えるにも重要なものだと思います。

子どもが保健室に入ってきます。

入ってくる時の表情、ときには入ってくると同時にある言葉、ときにはのぞくだけで、入って来られない。これらを見逃さないようにしたいと思つていきます。この時の表情、動き、言葉、子どもが私に伝えてくるもの一つだと思つたのです。

最初入ってきた時の子どもから伝わってくる私が感じた思いを、私は大切にしたいと思つています。最初の表情から伝わってくる子どもの気持ちは、私が思うより複雑だったり、検討はずれだったり、当たっていたりです。そして、入り口から私の所までやって来る動きで全体を見ます。子どもが、どこを痛いと感じ、どこに気持ちを置いてあるかを感じるので。

私が保健室の仕事として大切にしていることの一つです。これはもしかしたら言葉のまだ少ない幼稚園より、言葉を使えるようになり、いろんな

言葉で表現できるようになった子どもたちのいる
保健室で必要なこともあるのだと思います。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

こころとあたまの人間学から

吉増 克實

わたしたちは、リズム的に拍動しながら永遠の更新を繰り返すいのちの宇宙の一部です。ひとつとして同じものない一つ一つの個性的なこころは世界に織り成されて無意識のうちに宇宙の万象と交流し響きあっています。人間は目覚めたこころを通じてその作用を受け止める共感の中心とな

り、同時に動かされる肉体を通じてその心を表現する中心となるのです。こころはもともと共感と表現を通じておのずから伝わるもの。でも、もしわたしたち現代人がそう感じられないとしたらなぜなのでしょうか。

わたしはいま、「心の医療科」という診療科の